

巻 頭 言



## 躍進する日本補綴歯科学会学術大会 Breakthrough Annual Meeting of Japan Prosthodontic Society

日本補綴歯科学会 監事 村田比呂司  
Hiroshi Murata, DDS, PhD

窪木理事長のもと本学会の監事を拝命しております。約40年近く本学会に属しており、これまでいくつかの委員会に所属させていただきました。監事として理事会、委員長会等に参加させていただいておりますが、執行部の先生方の献身的な活動にただただ感服しております。これも窪木理事長の補綴歯科学への熱い情熱が皆様に伝わっているからだと思います。

さて私は第134回日本補綴歯科学会学術大会（2025年5月16日～18日、出島メッセ長崎）の大会長を仰せつかり、学術委員会委員長の澤瀬教授はじめ、関係の先生方と準備を進めています。その過程で過去の本学会の学術大会の内容が気になり、約30年前の抄録集を見ました。発表者には、現在、教授等で活躍されている先生方のお名前が多くあり、その教室で先陣を切って研究を推進されておられたことをあらためて認識しました。これまで本学会の執行部をはじめとする先人の先生方のご尽力により、現在の本学会の学術大会は非常に充実した内容になったものと思います。約30年前のある学術大会では、特別講演、シンポジウム、教育講演および市民フォーラムがそれぞれ1題（計4題）、口演68題、ポスター発表81題でした。一方、第133回学術大会では、特別講演、海外特別講演がそれぞれ1題（計2題）、シンポジウム7題、委員会セミナー4題、臨床関係のセミナー7題、専門医研修会1題、ハンズオンセミナー5題、イブニングセッション5題、ランチョンセミナー10題、その他の企画3題、課題口演9題、一般講演（国際セッション含む）88題、ポスター発表（国際セッション含む）179題、その他、と当時は年2回ほど学術大会が開催されていましたが、それを考慮しても本学会活動が企画の質・量の観点からも飛躍的に活発化したことを物語っています。おそらく学会の運営と企画立案等の役割をそれぞれ、大会校および学術委員会等の各委員会に分担させることにより、充実した学術大会に発展したものと思います。これは堅実な学会運営の成果です。学会によっては、大会校が運営と企画等をすべて担当しているところもあるようです。研究に関する企画も充実してきましたが、研究のみならず臨床の企画も充実させることにより、学会員の臨床能力の底上げにも貢献していると思います。

学生の講義でも常々力説していることですが、もちろん他分野もそうとは思いますが、補綴歯科学ほど多くの学問領域に関連する分野はないと思います。臨床疫学、口腔機能、全身の健康との関係、QOL、生命予後、再生医療等のバイオロジー、材料、新技術、ニューロサイエンス、高齢者歯科、症例、審美、栄養、摂食嚥下など、非常に広い範囲の学問領域に関連しているのも、補綴歯科学の特色でもあり、魅力です。

日本補綴歯科学会に取り組んでいただきたいことはたくさんございますが、私個人としてはデジタルデンティストリーの推進を是非ともお願いしたいと思います。ご存じのように、時代は変わっても歯科補綴臨床は歯科技工士の支援なくしては成り立ちません。歯科技工士として従事される方が減少している現在、やはりその不足を補い、さらに補綴装置の品質レベルの維持には、歯科技工や診療のデジタル化推進が必須です。クラウンブリッ

ジ領域ではすでにデジタル化が実用化されていますが、有床義歯領域においてはまだ研究段階だと思います。とくに顎運動に調和した良好な咬合関係を有する義歯の製作が可能な技術を期待しています。毎年、私自身、歯科材料の国際規格制定のための ISO/TC 106（国際標準化機構／歯科専門委員会）という ISO 国際会議に出席しています。この会議に出席すると、日本の歯科材料の技術は世界トップだなといつも認識を新たにしています。日本の工業技術をもってすれば、近い将来、義歯製作のデジタル化も実用化するのではないかと期待しています。

冒頭でも述べましたが、第 134 回学術大会は長崎で開催されます。最先端の研究とその動向、補綴の基本となる臨床技術および先進的な治療技術の習得、補綴歯科学の将来など、得るべきものが多い学術大会となるよう準備を進めて参ります。長崎は江戸時代、鎖国で閉ざされていた日本で唯一、海外と貿易ができる町でした。そのため、長崎は中国、オランダの文化が混ざり合った和華蘭文化の町です。この魅力的な都市で学術大会が開催できることを感謝申し上げます。皆様、是非、長崎にお越しください。